大神姓佐伯氏の研究 (1)

東宇和郡緒方家の由来と緒方家譜

さとうたくみ
（会員・佐伯市池船町）

はじめに

平安時代末期から戦国時代の終わりまで、約四百年にわたり佐伯荘を治めてきた佐伯氏について、これまで会員諸兄の研究が「佐伯史談」誌上に蓄積されている。

通史の中では昭和二十六年に増村隆也著「佐伯郷土史」前編に、昭和四十九年に刊行された佐伯市教育委員会編「佐伯市史」の【第二章中世史】の中に当時の研究成果が編纂されている。

最近の刊行物としては、平成元年の佐伯市教育委員会編「佐伯氏一族の興亡」に古代から中世の佐伯が最新の論説でまとめられ、平成三年刊行の渡辺澄夫編「豊後国公領荘園史料集成六」では、金石文や古文書など佐伯荘関連の史料が年代順に集大成され、巻末の【解説】には佐伯荘の解明に関する問題点がいくつか提起されている。

特に佐伯荘の成立から鎌倉時代にかけては史料不足のため、ほとんど未解明で問題提起に終わらざるをえないというのが実情のようである。

その中で唯一『佐伯氏系図』によって一族の系譜を知り得るのであるが、『豊後国図田帖』に記された人物名と符合する部分は『佐伯氏系図』の正当性を物語っていると思われる。

我々は、各地に分布する佐伯姓の方々にアンケート調査を行い、現地踏査して一族の伝承や系図等の収集に努めている。これらを繋ぎ合わせ、あるいは比較検討する中で佐伯一族の実像に迫りたいと考えたからである。

その中で愛媛県東宇和郡野村町の『緒方家譜』は、最も正統で内容が充実しており、大神姓佐伯氏の究明に貴重な史料と思われる。先ずは緒方家の由来を紹介して、後に『家譜』に添って論述を進めたい。

『緒方家譜』との出会い

我々が愛媛県東宇和郡野村町の緒方家のことを知った

のは昭和六十二年、「土佐の佐伯一族」を寄稿いただいた高知県の会員、堅田貞志氏から送られてきた「野村郷土史」の抜粋コピーからである。

それには【緒方一族について】と題して、弘治年間（一五五六）伊予に亡命した佐伯惟教の孫、惟照（惟真の子）に始まる興味深い緒方家の由来が記されていた。末尾に『緒方家譜』が収録され、この家譜の内容にも驚かされたが、半信半疑のまま年月を過ごしてしまった。

平成二年、「伊予史談」二七七号に野村町にある中世の山城、白木城蹟研究会の紹介記事が掲載され、「白木城の研究」緒方真澄編が刊行されたことを知って、早速送っていただいたが、調査研究の成果が次の各章でまとめられている。

第一章　白木城主の系譜
第二章　白木城城郭遺構
第三章　白木城支配領域と枝城城主・直臣系譜
第四章　白木城関係年表と伝承

第一章・第三節に【緒方藤蔵人惟照】に関する記事がまとめられ、惟照の遺品と伝わる甲冑・馬具の写真が掲載されている。（右下と次項に転載）

緒方藤蔵人惟照の甲冑

「野村郷土史」によれば、昭和六年夏に緒方家の宝物数千点が展示されたことがあり、「鎧、兜、鉄砲、弓、長刀、手槍、刀箱、武具箱、具足、具足箱、旗竿、旗入長持、飾弓、御持筒、鳥毛槍、小道具入、矢箱、丸薬箱、陣刀、長柄傘、香、等が特に豪華なものに見えた」と記録されている。

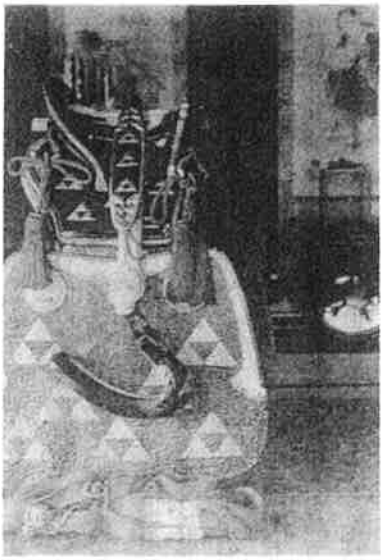
平成五年九月七日、会員汐月三代吉、林寅喜両氏と私の三人で野村の緒方家を訪れた。

当家は江戸時代から続く酒造家で、当主は白木城蹟研

究会の会長であり、「白木城の研究」の編者である緒方真澄氏、本職は聖カタリナ女子大学の教授である。

教授はちょうど松山市へ出かけるところだったが、「一度、佐伯へ行ってみたいと思っていた」と言って我々を快く迎え入れ、「系図だけは見て帰って下さい」と言い残して出かけられた。

宝物類は蔵の中に納めているとのことで拝見することはできなかったが、系図は広げながら写し撮ることができた。あいにくの雨で白木城の山容を仰ぐことはできず、緒方家の菩提寺安楽寺と三島神社だけを回って野村町を後にした。



緒方藤蔵人惟照の馬具

以上、入手した文献資料等から緒方家の由来を考証してみよう。

佐伯惟教の伊予国亡命

この事件については『大友興廃記』に【惟教予州に居住有し子細のこと】【佐伯惟教、伊予国より豊後へ渡海の事】と題して記述がある。「佐伯市史」では【惟教父子伊予に渡る】と題し、「佐伯一族の興亡」では【佐伯惟教の豊後退去】と題して、詳しく論述されているので参照されたい。

『緒方家譜』では惟教の事跡に

佐伯紀伊介　母高橋左京進女

天文二十年、興菊池合戦之時、従興角隅越前守軍配争論之事、国中不一和、弘治三年丁巳五月、同男惟真、鎮忠辞豊後。同年六月二日、赴伊予国宇和島、国司西園寺公広厚遇之、居同郡野村白木城。後、応大友入道宗麟招、帰于豊後、依旧居佐伯。

天正六年戊寅十二月十二日、日向国高城合戦、於名貫川、與田北相模守鎮周、同惟教父子三人共戦死。

とあり、豊後退去について『大友興廃記』の記述を引用している。

昭和五十九年発行の「愛媛県史」では【大友氏の宇和侵攻】の項に惟教を取り上げ、次のように解説している。「なおこの佐伯惟教は、弘治三年[1]（一五五七）五月に義鎮に恨を抱いて一族を率いて豊後を退去し、伊予の西園寺公広[2]の許に赴いて、その庇護をうけ、さらに野村殿宇都宮氏の被官となった（増補訂正編大友史料・緒方氏由緒・耶蘇会士日本通信）。同年五月、大友氏は、佐伯惟教の逃亡先を探索し、伊予の御荘氏（三庄氏と記す）一族に対し、その方面に落ち行けば、討ち果たすように依頼している（大分県史料一一巻所収工藤文書）。

御荘氏については、前述したので詳細は省略するが、同氏は法華津氏などと同様、西園寺氏との結びつきは弱く、むしろ土佐一条氏、豊後大友氏と親しい関係にあり、かなり独立的な存在であったのであろう。このときの大友氏奉行人の連署状の中にも「此節御入魂を以って」とあり、大友氏との関係の浅からぬものを感じさせる。やがて惟教は豊後に帰国して大友氏に再び仕え、伊予野村に残った惟教の子孫（惟実[3]・惟照）は、野村殿宇都宮氏にかわって白木城主になり、白木、あるいは緒方氏と称し、西園寺氏の直臣となった（宇和旧記・野村郷土史）。」

以上、大筋は『緒方家譜』に準じたものであるが、問題点に注釈を加えておこう。

註

1　「佐伯一族の興亡」では、『耶蘇会士日本通信』の記録によって一五五六年五月、すなわち弘治二年に起こった事件であると指摘されている。とすれば、原典となる『大友興廃記』の誤記がそのまま流布された結果であろうと思われる。『緒方家譜』では永禄十二年を五年と記す等、漢数字の読み違いがあり、誤った年号の干支は後に付されたものと思われる。

2　弘治二年六月当時は西園寺実充の代で、同年九月、嫡子公高が東多田飛鳥城の戦いで戦死したため、来応寺住職公広を還俗させ西園寺の跡を継がせたという。佐脇貫一氏の説では、実充が上洛した永禄三年以後に公広が継承した、とする。

3　惟実は惟真のことと思われるが、彼は父惟教と豊後に帰国したので野村に残ったのは惟真の子惟照一人である。

惟真の野村居住

さて、惟教らは伊予の何者を頼り何処に居住したかについて、故佐脇貫一氏は「佐伯史談」五三号【佐伯氏と伊予地との関係】の中で、大神系図に見える萩森氏との関係を指摘し、惟教の妹が嫁いだ萩森氏は宇都宮房綱であろうと推測している。

愛媛県側の文献によれば

◎萩の森城　八幡浜にあり。城主は宇都宮彦右衛門尉藤原房綱といふ。房綱は喜多郡大洲城主宇都宮総洲（清綱）の二男なり。嫡男豊綱に大洲屋形の城を譲り、父子共に当城に移住せり。（伊予古城跡）

◎西園寺殿十五将の一にて、世に萩森殿といふ。保内郷にて七千八百石を知行せり。（愛媛面影）

◎宇都宮彦右衛門尉房綱

萩森城・高森城・城高・飯城、四ヶ所。

舎弟吉之丞・法名喜清、子息金助。

手勢八十三騎（氏名略）。（予章記・河野分限録）とある。

当時、喜多郡宇都宮氏は、中予・河野氏および宇和郡・西園寺氏の狭間にあって、両者どちらかの旗下に

室町期伊予国人の分布
（愛媛県史より）

降るか、強行に一郡守護の座を守るか、苦慮の選択を迫られていた。大洲城主清綱の隠居は、あるいは強行路線の嫡男豊綱の排斥にあったためとも考えられる。

惟教ら一行が八幡浜に渡った弘治二年、その年の九月、西園寺実充と宇都宮豊綱が境界紛争を起こし、実充の子公高が東多田飛鳥城の戦いで戦死する。実充は世継ぎを失ったため、来村の来応寺住職公広を還俗させ、西園寺の跡を継がせた。（三間町史）

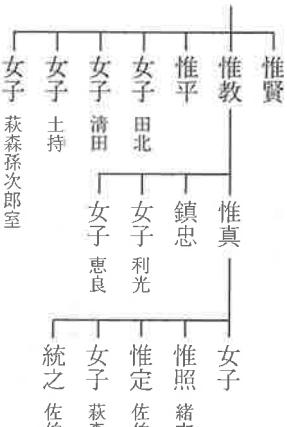
この合戦に萩森城主宇都宮房綱が、どのような立場にあったか定かではないが、佐伯惟真が西園寺氏の厚遇を得て、野村の白木城主宇都宮乗綱の被官となった経過からして、西園寺氏側であったと考えられる。

惟真が野村の地に四十五貫分の知行を得ていたことは、後述する『知行充行状』に明らかであるが、父惟教が野村に同居していたか八幡浜にあったかは不明である。ただし『高畑理兵衛覚書』には、理兵衛の出生について、「親父三郎右衛門が惟教に従い予州に詰めていた時、永禄八年予州八幡浜に生れた」と書き残しているので、あるいは豊後と交信のとりやすい八幡浜にあって、豊後帰参の機会をうかがっていたのかも知れない。

惟教・惟真の豊後帰参

伊予の地に十二年余の歳月を経た永禄十二年三月、惟教らの豊後帰参が現実のものとなった。しかし豊後は西園寺氏にとって敵国である。惟真は西園寺氏ならびに白木城主宇都宮乗綱の恩義に報いるため、質を出さざるを得なかったと思われる。

『緒方家譜』は野村緒方氏の祖惟照を惟真の長男（惟定の兄）と伝えている。



また佐伯朗氏の「藤堂高虎家臣辞典」に藤堂家に仕えた萩森又兵衛の系譜を紹介している。

清綱　大州城主
- 豊綱　大州城主
- 房綱　萩森城主
  - 乗綱　宇都宮吉之丞
    - 重綱又兵衛・母は佐伯弾正少弼惟真の女

もしこの吉之丞乗綱が白木城主左近丞乗綱と同一人物であるとすれば、惟真は娘を乗綱の室に、惟照を野村四十五貫分の跡目に残したと考えられる。しかし年齢差を考えれば、系図にある惟定の妹は惟照の姉に置き換えるべきであろう。白木城主乗綱にはすでに図書という嫡男があり、老齢となって迎えた側室と考えればつじつまが合うのだが、一考を要す所である。

惟真の子惟照の事跡

「白木城の研究」を参考に簡略にまとめてみよう。

惟照が野村に置き去られて一〇年、彼は成人して一人前の武将になっていたが、元亀三年（一五七二）の豊後勢（惟教ら）宇和郡侵攻によって西園寺氏の不信をかっていたのではあるまいか、祖父惟教と父惟真が天正六年（一五七八）の日向高城川原の合戦で戦死を遂げ、初めて西園寺氏に受け入れられたのであろう。

○天正七年二月十九日、公広、大神小左衛門尉（緒方氏）を与次兵衛尉に任ず。（旧記）

「東宇和郡沿革史」

天正七年（一五七九）五月、宇和郡の三間表に土佐長宗我部氏の大軍が侵攻した際、白木城主の宇都宮氏に従って出陣、その戦功により西園寺公広より次の感状と一〇貫の知行を与えられている。（白木城の研究）

猶々子々孫迄、及揚名如此候、已上今度中野通政実子の末男并西両人企謀反、土州衆籠岡本之城切取候処、当日切帰候刻、其方無比類手柄被仕候ニ付、豊州土州従両国、取懸候砌、及加勢腹之所、浚海陸対当家数度之忠節候間、ほうひとして、知行拾貫分可差遣候、請取次第可有言上候者也

天正七年五月二八日　　公　広（花押）

緒方与次兵衛殿

この後も惟照は、長宗我部氏の侵攻があるたび、宇都宮氏に従って出陣、天正九年（一五八一）の戦功によって初めて父惟真（治部少輔）の本領を継承できたことが、

次の知行充行状によって知られる。

○九年九月十一日、公広、白木与次兵衛に父治部少輔の所領を安堵し、尚十貫分の知行を増賜す（旧記）

「東宇和郡沿革史」

其方父治部少輔本領之義、四拾五貫分之所、向後者其方可為知行候、右領内少も治部少輔に者出入有間布候、即従此方拾貫分重而可宛行者也

天正九年九月一一日　　公広（花押）

白木与次兵衛殿

このころ白木城主乗綱に事情があって、惟照が白木城代になったとされ、天正十一年（一五八三）、土佐の長宗我部軍が大挙宇和郡に押し寄せ、野村の白木城を包囲したとき、戦意を失った乗綱に代わって総指揮をとり、名実ともに白木城主として野村を支配することになった。

しかし天正十三年（一五八五）秀吉の四国平定によって小早川隆景の指揮下に入り、天正十五年（一五八七）には九州平定に出征、惟照は豊前国筑城郡除原の戦いで軍功があり、同年三月吉日の日付をもって公広より藤蔵人に任じられたという。

その後、隆景に代わって南予には戸田勝隆が入封、西園寺公広は亡び、惟照も野村の地に帰農したと思われる。

○天正十八年三月、野村（本村・古市村・河西村）検地帳成る。（緒方本現存）　「東宇和郡沿革史」

文禄四年（一五九五）には藤堂高虎が宇和三郡の代官として板島に入封、高虎に仕えた弟佐伯惟定も板島築城に関わっているが、惟照はあえて仕官せず、野村の肝煎となり、元和三年九月一日（一六一七）に没し、野村の医王山安楽寺に葬られた。

○文禄五年八月、高虎、野村三島宮舞殿を再建す、本願大僧都神力坊、肝煎緒方与次兵衛、泉貨、三ノ太夫（棟札）　「東宇和郡沿革史」

○慶長九年五月、野村（阿下）三所権現社上屋を再興す。時の領主藤堂高虎、神主彦次郎、大願徳善院昌尊法印、肝煎緒方与次兵衛、弥左衛門（旧記）

「東宇和郡沿革史」

その後、慶長十九年（一六一四）以降は伊達家の支配下で、子孫は代々与次兵衛を襲名して野村の庄屋職を勤めた。

天明八年（一七八八）、緒方源治は酒造株を買い取って酒造業を始め、寛政五年（一七九三）に野村組の代官代、同七年、源治の子息三人が野村、富野村、釜ノ川村それぞれの庄屋に命ぜられ、源治は一生扶持を賜わり野村組の代官に任じ、御徒士格を命ぜられた。（東宇和郡沿革史）

以上のように子孫は村役を勤めながら繁栄して明治に至ったのである。

緒方家譜の構成

我々が拝見した系図は、紙質も新しく現当主緒方真澄氏まで整然と書き込まれているところから、新しく書き起こされたものと思われる。真澄氏の弟惟幸氏の談によると「天保の頃、系図を表に出して虫干ししていたところ、嫉む者によって火をかけられ焼失したので、他家の系図を借りて作り直した」と伝え聞いていると言う。

系図の内容から察するに、佐伯氏宗家の古記録無しには書き得ない記事が含まれていることから、惟照の時代から存在したものか、あるいは身分も財力も最高潮に達した緒方源治の代に、または明治維新前後に津藩の藤堂家に仕えた佐伯氏宗家に赴いて写し帰ったものではないかと私は憶測している。

明治以降東京にあった佐伯宗家は関東大震災、東京大空襲に遭って古文書類は焼失し、「小屏風」「手鉾太刀」「巴作之太刀」等の刀身のみが焼け残ったと、会員佐伯朗氏は「佐伯史談」一五九号に伝えている。

以下、系図の構成を便宜的に次のように分類してみた。

①大神神社高宮系図　○建速素盞烏命－－－－－良臣－庶幾－諸任

②未定義

③豊後大神氏系図　惟藤－惟任

惟基－惟盛－惟衡－惟用－惟栄

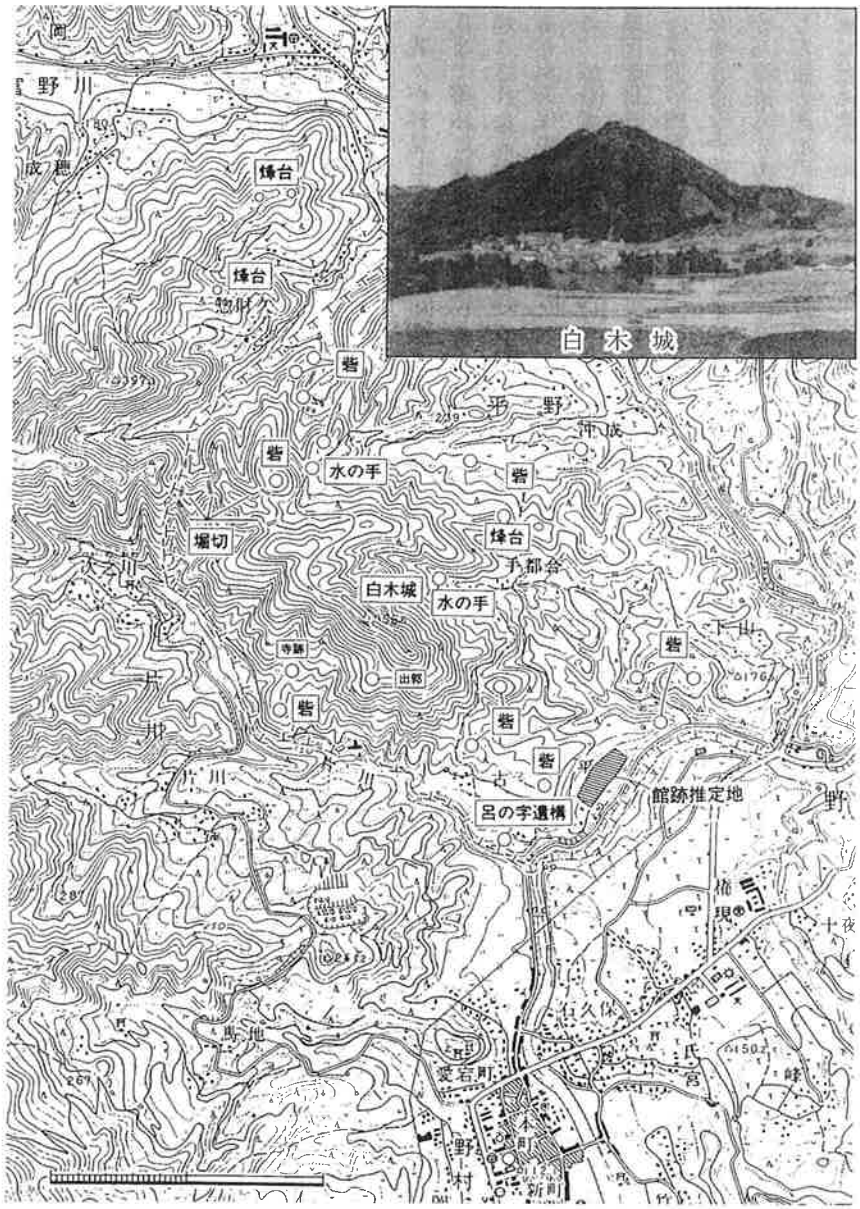
④豊後佐伯氏系図　惟家

惟安－惟朝－惟直－－－－－惟教－惟真－惟定

⑤津藩佐伯氏系図　惟重－惟寿

⑥野村緒方氏系図　惟照－惟忠－－－－－－－－－－－真澄

本題に入る前に『緒方家譜』の中から大神氏、並びに佐伯氏研究の論点、あるいは指針となる項目を抽出しておきたいが、紙面の都合で次号に譲ることにしたい。



白木城総構

国土地理院発行1／25,000地形図を縮小　（「白木城の研究」より転載）